

# 漢江社だより

第2号

平成9年11月発行

## 『書』——私見

乾 節子

その頃、命を賭けた国家的用務の裡に在ったとはいえ、書の研究に關しての数星霜に互る父が南帖、北碑の採拓、書写は、母の長三州先生、三枝五江先生への師事ということと共に、私ども子供達にも、ものの真髓、基本ということ、少なからず、根深く教えられたと信じます。

真髓を捉え基本の確立しておる筆は、時にわが意の赴くまま、例えば奔放に揮って、どのように逸脱したように見えても猶、矩を超えずということ、私にはしみじみと考えます。

その筆毛の一筋にも乱れのない運筆にしてはじめて、氣韻も風格も云々することの可能を私は思うのでございます。

六朝風の父の書風は流麗と申せましょうし、東京向島長命寺の碑林に見出した長三州の端正な楷書は、思わず、「母様の楷書は、恩師に酷似している」と云ってもいいすぎないと思う」と同行の弟、長江（丈夫）と語り合ったことがございましたが、

長江はともかく、この私はなかなか今になりまして思うように参りかねて居ります。しかし精進は一生のもの、決して忘るべきではありません。

父が心を傾けました書法、顔真卿のそれは彼の為人の、硬骨、純粹、碩学の上にある上に、当時、並びなき名筆の、内的な貴重な珠玉のごときものがあるのだと私は信ぜざるを得ないのでございます。

又、その顔法を学びとられました長三州、三枝五江を朋友にもちました祖父が、わが娘をこのお



二人に、前後がございませうが、お託し致しましたのも理解のゆく感じが私にもございませう。

清潔に洗った硯、心鎮めて磨りあげた墨、宿墨をのこさぬように洗った筆、左手の自然な形で体を支えた正しい姿勢、そして直筆を以って用紙に向う時、初めて、練習が真の効果を受け得ると申せませう。

よく、父が「日本には字かきが多いが、真の能書家は少ない」と申しましたが、筆の立つことに於ける腰の認識のいかかと思われる作品を拝見いたしますと、これは批評の外でございませう。

矢張り、筋の透った、又それ故にこそ、その氣魄もこめられましょうし、自然、その作品の前をたちさがりたい、或はそれを手放しがたい、そうした情感も湧いて参ろうかと存じます。

書とはそうしたものの、人、その各々の、匂いやかな跡とでも申せませうか——私はそう心得て居ります。

因に、篆、隸、草（行）かなに至りましてもこれは軌を一にするもので、個々、別々のものでは決してないことを申しあげておき度う存じます。

乾節子 明治三十七年十一月生。東京家政学院卒業。国文学及び現代文芸思潮のゼミ（東大）に池田亀鑑先生、短歌及び現代詩に北原白秋先生、家芸としての書は、父淡江夫妻にそれぞれ示教を享く。昭和八年より同四十六年まで、惠泉学園高校教師として在職。小著は「いくその春秋」昭和四十六年早春刊

# 岩田作兵衛翁功碑

岩田作兵衛翁功碑  
 川越鐵道株式會社  
 大正十年十二月

岩田作兵衛翁、武州國分寺至川越十八哩間也。始保清水、後增田、忠順氏等企畫而推排、監督當其任者、為岩田作兵衛翁。明治二十八年、開通運輸、從業二十有六年。大正九年、武蔵水電合同、東株主、謂本線之成、多賴岩田翁力。願建一碑、永記其功。時議決矣。夫東京四方、輻輳之地、其交通不可不嚴。使明治之初、官款、京濱鐵道、以開東海道、線之端、十四年、華族、神前、相澤、起日本鐵道、以為真羽、中仙、道、線、之、先、容、當、此、時、若、田、翁、金、甲、武、鐵、道、以、建、中、央、線、之、基、礎、次、第、設、枝、線、與、京、濱、日、本、二、線、通、立、完、命、和、交、通、之、利、其、見、也、大、矣。然、前、資、望、未、見、於、世、人、多、疑、其、成、否、翁、不、屈、周、旋、太、力、偶、與、兩、宮、歡、次、郎、氏、相、知、兩、宮、氏、企、畫、東、京、大、學、其、學、力、進、功、二、十、二、年、遂、開、甲、武、本、線、自、新、宿、至、八、王、子、二、十、七、年、通、青、梅、鐵、道、二、十、八、年、川、越、鐵、道、及、新、宿、飯、田、町、間、又、與、兩、宮、氏、謀、企、畫、上、請、東、京、市、內、備、環、鐵、道、東、京、市、街、及、東、濱、電、氣、武、相、中、央、南、北、中、央、諸、線、之、敷、設、更、欲、起、桂、川、及、多、摩、川、水、電、以、供、電、力、亦、可、謂、多、事、矣。且、夫、如、市、街、鐵、道、如、動、力、電、化、在、本、邦、皆、翁、始、之、業、於、是、子、岩、田、之、名、噴、噴、傳、斯、界、蓋、是、為、翁、之、極、盛、時、也。三、十、九、年、政、府、買、取、甲、武、鐵、道、又、所、買、金、高、上、請、諸、線、多、歸、他、手、翁、所、專、管、不、過、一、川、越、鐵、道、其、狀、雖、如、不、足、謂、宿、昔、之、功、政、於、民、政、於、官、皆、成、其、大、平、然、則、翁、之、志、也、剛、矣、為、翁、者、亦、可、無、恨、也。如、川、越、鐵、道、初、推、米、倉、一、平、氏、為、社、長、以、兩、宮、若、田、增、田、及、向、山、小、平、次、諸、氏、為、重、役、其、資、本、三、十、萬、圓、建、設、一、哩、僅、費、一、萬、五、千、圓、耳、而、能、收、其、功、世、人、驚、歎、取、諸、翁、自、三、十、九、年、振、興、諸、鐵、道、歸、國、有、以、未、私、設、小、鐵、道、紛、起、各、地、如、東、上、線、如、武、藏、野、線、如、川、越、電、氣、線、皆、翁、自、之、頭、腦、其、收、入、半、而、尚、不、能、制、之、死、命、者、由、建、設、費、之、極、少、如、彼、而、專、當、其、任、收、其、功、者、實、為、若、田、翁、則、前、之、功、德、決、不、可、忘、也。近、來、動、力、電、化、說、物、與、本、社、亦、蒙、諸、君、之、向、決、與、武、藏、水、電、同、之、諸、神、翁、若、田、翁、則、前、以、此、時、退、身、於、斯、界、欲、以、悠、悠、養、餘、生、亦、可、謂、功、成、名、遂、者、子、與、翁、始、終、提、持、經、營、者、兩、宮、氏、外、三、浦、泰、輔、伊、藤、藤、原、恒、隆、三、氏、亦、皆、最、盡、力、者、為、佐、藤、秀、松、永、田、保、之、助、二、氏、其、功、皆、不、可、沒、也。

舊川越鐵道株式會社株主建  
 磯徳昭刻

## 『岩田翁記功碑』見学記

松原美子(白葉)

昨年的大门碑林公園見学に次ぎ、乾淡江先生所縁の川越喜多院を訪ねるバス旅行が実施されました。平成九年五月三十一日(土)梅雨入りまぢかな晴天の一日、二十四名の参加でした。

本川越駅前より、貸切の『小江戸ばす』で、市内の名刹や博物館、往時の繁栄を偲ばせる蔵造りの古い街並等を巡りました。

中院から喜多院までは、熟練したガイドさんの御案内にて、徒歩で見て廻りました。旧市街は敵の進入に備えて、道がカジ状になっていたりする

そうで、今日の交通には不便もあるようです。さて、何といってもこの度の一番の目的は、喜多院境内にある、淡江先生の筆に成る『岩田翁記功碑』の見学です。

喜多院本殿の前は広くひらけていて、他にも五百羅漢や、江戸城から移築された建築等があり、目指す碑は向って左手の植え込みの中にありました。拓本と写真でしか拝見したことのない私には、まず、実物の大きさに圧倒されました。およそ三メートル程もあるでしょう。土台の石も入ると更に高く、真下に立つと、もう上の方の字が読めない位でした。

土台石によじ登ってまじかにながめると、どこ

この碑は交通事業先達の一人といわれる岩田作兵衛の功績を讃え、大正十年、旧川越鉄道株式会社株主によって建てられた。碑の篆額、銘文共に乾淡江の筆に成り、銘文の楷書には、当時の風潮であった六朝北派の影響によるとみられる北魏の風がある。(埼玉県川越市喜多院境内)

### 解説

五月の川越見学旅行の後で、乾たみ夫人より「雪月花—国語と文化と教育の季刊誌—第八号(昭和五十六年七月発行)」という小冊子を見せていただいた。この中に、乾節子先生が父母淡江・玉江先生の姿を通して「書」を語られた文章があり、時宣を得たものとして、転載のお許しをいたゞいたのが巻頭のエッセイである。

淡江社を創設された乾淡江先生の書は、戦災に会い算える程しか残っていないので、私達の目に觸れる機会も少い。川越喜多院にある岩田翁起功碑は、淡江社にとっても文字通り記念碑的存在である。

長江先生は、昭和五十二年に淡江逝去五十年記念として『乾淡江書岩田翁起功碑』という立派な法帖を出版された。先日川越行のとき、この一冊を市立博物館に寄贈し、貴重な資料として感謝された。

私達は今後も折りに觸れこの帖を鑑賞し、岩田翁碑を大切に護り、語り継ぎ度いものと思う。

(大岡)

を取っても完成された瑞々しい書体の文字が並び、石であるにもか、わらず、人肌のような暖か味が伝ってくるのを感じました。

私たちの愛する淡江社の書風がこのような形で残され、人々の目に触れることをとてもうれしく誇りに思いました。

大正十年十二月の建碑と伺いましたから、七十六年余を経たことになるわけです。風雪に耐えた石肌からも、生い繁る周囲の木立ちの大きさからも年月の程が偲ばれます。

今回は長江先生の奥様が一緒でしたので、道中碑にまつわるお話しを伺うことができました。しかし、歳月と共に、建碑の経緯をご存じの方が地元にも少なくなってしまうのではと、少々不安になりました。

ご案内下さったガイドさんのお話しは郷土愛に溢れ、博物館の展示からは市の歴史文化保存収集へのいきごみの程が感じられました。私たちの淡江先生の碑も、是非大切に保存し、後世に伝えて頂きたいと思いつ、帰途につきました。

この度の見学会を担当して下さいました皆様に、心から感謝申し上げます。



## お稽古の思ひ

金丸紀子(紅花)

長江先生のお稽古は、筆法を柱に、筆法を支える人間、その生き方を問う言葉がいつも一体になっていたように思う。先生ご自身が目の前で厳正に、しかも優しく、その姿勢を体現してみせてくださることを何と心地よく感じてすわっていたことか。それらの言葉は時には「あっ！」と思ってストンと落ちつく言葉であり、時に、容易には奥底まで触れるに至らないけれども、先生の傍に身をおいていれば、いつか理解できるにちがいないと思われる深遠なものもあった。そして先生は、これらの言葉を示される時、あまりに瑣末な価値にとらわれている現代社会への大きな憤りをおもちであることも切実に感じることができた。そのひとつひとつを書き留めておかなかった怠慢を、今とても後悔している。

お稽古に伺いはじめた頃、糸偏を解説して下さるなかで「篆書のㄨ(序)は蘭の糸口」と教えられた時はとても感動した。あっ！と思った。文字を創った古代の人のこころ深さにまずうなり、蘭の糸口を捜すようにしていけば、大事なものはずみつかるといふ気にもなった。序というかたい語が、急に身近な忘れられない意味をもつことばになった。先生の文字の解説はいつもこんなかたちで入ってきた。

篆刻でも文字を書く場合でも、書くところより書かない部分の方が大事という教えも、多くの方が耳にされた言葉だと思ふ。画で捉えず、全体で見ることがどれほど大切なことか、全体を捉えるためにはまた部分を捉えていなければならぬこと、使転で書くということは、全体が通せる、見えるということ、そういう書き方ができていないと甘くなってしまうということを経度もくり返して導いていただいた。

わたしのよう器用に筆を扱うことができず、書に特別の興味を寄せてもいなかった者が、よい年になってから幸運にも先生の門をくぐらせていただき、怠けながらも楽しんで通わせていただいたのは、書が決して技でなく、生命につながる修養の糸口であることを正真正銘のお手本を示して、教えつづけていただいたためにほかならない。

手筋などありませんよ、筆法さえ手に入れば、誰でも筆を扱えるはず、お母さんが箸を持つことを子供に教えるように筆の持ち方を伝えていくことが望ましいと言われた淡江社の筆法指導(実際、この筆法を伝えること、更にまとめることへの先生の熱意は並々ならぬものがありだっただけと思ふ)は、多くの人達に伝える責任があるものだという気がする。



# いかに書くかより いかに書かないか

三宅玲子(白玲)

私が長江先生の門下に入れていただいていた早くも四半世紀 人が生まれて社会人となるほどの長い時間です。その間、さまざまな理由で休むことも多かった私ですが、先生には書の実技のほかに「用筆論」「書道史」「書論」「篆刻の話と実技」等、たくさんのお話を教えていただきました。何ごとにも当たっても、まず準備が大切だということをお話して下さって、先生は、講座のたびに、たくさん資料をご用意くださいました。先生ご自身の手で大学ノートにびっしりお書きになったものの他に、私たちに解りやすいようにと、ていねいな図解もそえられていました。

しかし、内容は、中国の故事、古文の引用が多く、かなり高度で難解なものでした。私などは、日頃見馴れない漢字にルビをふっている間に、かみじんのお話の方を聞き逃すというようなこともたびたびでした。それで折角いただいた資料も、私にとっては「猫に小判」のようなもので、長い間、本棚に眠っておりました。

最近になって、ある動機から、当時のプリントを久々に取り出し、読んでみる気になりました。その動機というのは、かつて、先生からうかがった、ある言葉の意味を、もっと鮮明にしたいとい

う気持ちからでした。

「いかに書くかより、いかに書かないか……」

あるとき、先生がおっしゃったこの言葉に私は強く惹かれ、ずっとこだわり続けていたのです。

おっしゃったことの意味を漠然と解しながらも、これらの資料を読み返すことで、さらに何かを把握したいと思いました。ざっと拾い読みした限りでは、私の目指したものは見つかりませんでした。が、おかげで、当時、むずかしいと感じられたことからも、少しずつ理解できるようになり、それだけで目的を達した気分になりました。

「いかに書くかより、いかに書かないか……」

おぼろかしい話ですが、私はこの言葉の内容をふたとおりに考えて、そのはざまに悩んでいました。

その一つ「書法をしつかり身につけた後は、書くという意識から離れて、自分の心をうつしなさい……つまり「手にまかせてお書きなさい」という意味。しかし、そのほかに私の心の中では別のこだわりがあったのです。

お経をならわず絵ばかり書いていた小僧の雪舟(室町時代の画聖)が和尚の怒りをもって柱に縛られ、泣いた涙で床に足をつかって描いた鼠の絵がまるで生きていくような感じというのは有名な話ですが、その雪舟も、晩年は、一つの円で何かを表現しようとしています。また、若い頃、写実的な絵を描いていたピカソも、後にあの獨得な画風へと移っています。無駄をなくした後にくる集約、

抽象の世界、もしかすると、長江先生は、後者を指しておっしゃったのではないかと――。

しかし、この二つの微妙な解釈にこだわり続けてきた自分の愚かさにやっと気がつきました。前者は方法、後者は結果であって、先生はこれらのことからのすべてを含めておっしゃったのだと思います。

この愚かなこだわりのおかげで、先生が与えてくださった資料も読み返すことができまし、あるいは天国の先生が「もっと勉強をなさい」と、このように仕掛けてくださったのではないかと思ひ、感謝しております。



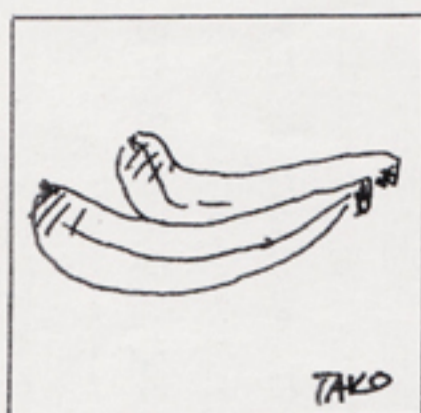
# 子供達と書に関わって

寺内治美(芳泉)

二十数年前のことです。「先生、隣りのお子さんに、お習字を教えてもよろしいでしょうか？」オズオズと長江先生にお尋ねしました。先生のもとへ通い始めて約四年目の夏でした。我が家の隣りに来春小学校に入学する男の子が居て、私が書の稽古をしていることを知った母親から是非にと頼まれたのでした。

私の話を聞かれた先生は、ちよつと首をかしげてから「やってごらんさい」とおっしゃってくださいました。このことが以来子供達を教えるべくきっかけになりました。

そして手さぐり状態の私に「子供達に教える時一番大事なことは、正しい書き順と、筆をまつすぐ使うこと、腕を使って正しい筆使いができるように指導すること」とアドバイスをくださいました。



また、絵を描く時と同じように紙の真中にバランスよく書くように。たとえばバナナを描くとき「紙の真中に描きましょう。」といえ、誰でも上記のように描くでしょう。文字も同じことです。全体をよく見ると、□の真中に書くことがたいせつですと言われ

ました。

それらの教えをよりどころにして、主人の転勤で地方に暮らした時も、常にその土地の子供達を相手に書にかかわってきました。私が子供の頃通った書道教室のことを思い出して、そのやり方もとり入れました。それはある程度、小学校の教科書に添って進路を合わせたものでした。

今思うと、漢字を沢山覚えさせたいという気持ちも手伝って、随分むづかしい文字を必死で教えこんだ気がします。

生徒の前にすわって筆を持ってあげること。(皆様がご承知のように、教える側はサカサマの字を書くことになります。)

篆・隸を交えて、字の成り立ちを説明すること。この二点に於て、子供達の尊敬を少々集めていられるのかなと思っています。丁度、私が長江先生の前にすわって筆を執っていたいたり、筆の動きを拝見している時にまるで手品を見ているような不思議な気持ちを味わったように。

もう一つ子供達との稽古で大切に守っていることがあります。小学校、中学校の卒業の節目に記念作品を残してあげることです。子供達にも親達にも本物指向できちんとした作品を作ることを伝え、篆刻のマネゴトをさせ、印を押して額に仕立てます。そういう作品がどうにかまとまり、長江先生に学んだことを充分生かした小さな展覧会を

開いたのは、先生が逝去される一ヶ月前でした。会のあと病院へ展覧会の写真を持ち、報告に伺いました。永眠される十日前のことでしたが、先生はいつになくお元気でよく話をされ、写真をご覧になってとても喜んで涙を流され、どうぞよろしくと言われました。その折りの先生のお心を思い、現在は先生から学んだ事を少しでも多くの人に伝えたい、残したいという気持ちで、日々努力を重ねたいと思っています。

## やっと小学校を卒業したばかり

古橋 榮 三

何年か前から時々淡江社の展覧会を拝見してその書に魅せられ、教師生活の定年を機会に三宅さんにお願ひして、長江先生、本先生をご紹介頂いて六年が過ぎ去った。初日落合の先生のお部屋で緊張して正座していると、正座が苦手な小生をお氣遣い下さり、三宅さんがお楽にと行って下さった。その時すかさず、長江先生は「正座は健康に大変良いのですよ」と言われた。その淡々としたも湛然とした一言は、なすすべが無く心安らかなかった小生にとっては「葵の印籠」の効力があつた。教室は簡素で小生にとって大変好ましい雰囲気であつた。本先生にご指導頂いて三回目の時

であつたらうか。長江先生が廊下を通られた時、一寸足を止めて小生の書きっぷりを後ろから御覧になり「何回目ですか。筆使いは宜しいようでございます」と言われた。小生にはこれが長江先生のお話を直接伺った最後となつた。その後文字を書くようになってから、もう一度でもご指導を頂きたかつたなと思つたものだ。しかし今、特に「淡江社だより 第一号」を拝見しこれは大変な間違

である事に気がついた。諸先輩による長江先生のご指導について「一点一画の筆の使い方もおろそかになさらない大変厳しい先生」「手を持って懇切丁寧なご指導」「世間ではあの人は筋が良くないなどと言いますが筆法の修練をすれば誰でも字がうまくなります」「書は晩成の芸術」「全身で筆法の要諦をつかむ事」「稽古を続けるのも才能の内」「自ら筆を洗つて下さり少しは書きよくなるでしょう」「惜しみなくお手本を書いて下さつた先生」「墨をする事、紙を切るなど先生御自身がなさることを拝見しながら何となく覚えていく……等々のお話を拝読し、目の前で惜し気もなく書いて下さるお手本をはじめとして、長江先生の御心が確実に受け継がれていることをしみじみと感じ、現在の指導は長江先生のご指導と全く同じである事を知つた。勿論長江先生のお話には他では得がたい人格・思想に接する喜びがあつたであろう事は推察出来る。と同時に現在の先生方はずつとお若い方ばかりであり、長江先生にはなかつた、あ

るいはそれ以上のご指導もあるに違いない。おそらく長江先生は天国で「いやいや心配する事はなかつた。私の考えとそれ以上に良い指導をしてくれている」とにこにこ喜ばれておられることと

思う。  
正直二、三年、一生懸命やれば何とか字が書ける様になるかと思つていた予想は完全に打ち碎かれた今、もう十年早く始めていれば良かったなと後悔しきりである。ただひたすらに苦しみなながら書くことを楽しんでいる。七十をとうに越えてやつと小学校卒業したばかりの、先が限られたわが身の現在の心境である。

為楽當及時 何能待來茲 (漢詩名句辞典より・漢 無名氏)

## 書道の研究会(第二回)

大岡明男(瑛川)

上諏訪合宿(昭和十六年八月)

一学期で、今の基本筆法の手本と同じ課程を終了し、草書の筆法を習い始めた頃夏休みに入りました。上諏訪で合宿し、秋に予定されていた展覧会のために、私にも半折に楷書と草書で五言絶句の漢詩を書くように言われて、練習に励むことになりました。

この年十二月には愈々太平洋戦争に突入する前夜で、世の中は何となく不安な空気に包まれていました。

塾でも、学生の学外での行動は制限されていたが、書道会は、長江先生が指導されておられた陸軍病院の「白衣の勇士と塾生の交歓による慶應義塾書道会展覧会」の準備ということで、特に許されていたことを後で知りました。

合宿は諏訪湖に近い山腹にある禅寺の宿房のよ

うな建物で、湖を木の間越しに見下す閑静なところでした。食事は町の給食施設から届けられ、食事を頂いて、最後はお湯で漱いで各自棚に片付けるのでした。町の人達の気持ちに配慮して、英霊の帰還の日は、制服制帽で駅前に整列してお迎えしたこともありました。午前中に書の稽古、午後は小学校でソフトボールをしたり、夜も町に出て喫茶店で「パリの屋根の下」のレコードを見付けて聴いてみたり、朝は湖畔を散歩したりと、静かな湯の街の生活を楽しむことができました。霧ヶ峰高原に続く山を背にした禅寺の庭は、泉水に山の嵐気が迫り、静寂境に杜鵑の声がよく響いていました。

### 太平洋戦争

さて二学期になって、予定どおり十一月、銀座三越での書道展が開催され、合宿以来の学生達の努力が実を結びました。私も入門半年ばかりの身で出品させていたゞき、今考えると冷汗ものでした。

昭和十六年十二月八日、太平洋戦争が始まって

愈々日本の前途はどうなるのか？ と不安が募りました。戦局は始めの三ヶ月程は威勢が良かったが、戦線が拡がるにつれ、補給路が延びて、アチコチで綻びが出始めた推移はご承知のとおりです。そんな世情の中でも、書道会の稽古場だけは別天地のような静謐な空気の中で稽古が続けられていました。

### 長岡合宿

昭和十七年の夏休みは、伊豆長岡の二升庵という、犬養毅首相が使ったこともあるという由緒ある別荘で合宿をしました。別荘の持主である元町長の松本氏のお嬢さんが、節先生の友達という縁故でお借りできたものと聞いておりました。二十名余りの合宿には手頃の大きさと、ガッシリした建物に、石組みで段差のある庭も枯淡の趣きがあり、学生の身分には勿体ないくらい立派なものでした。食事は物不足の折、松本家の人々が苦心調達された手料理を感謝して、美味しくいただきました。

合宿の終りに、半折大の作品等を座敷に飾って、松本家の人々にも見ていただきました。勿論、今回も午後は、バスで三津浜や静浦の海まで海水浴に行ったり、小学校の庭で、持参の模型グライダーを飛ばしたり、ソフトボールをして大いに楽しみました。静浦へ行くバスで、窓から花の香りが入って来たので外を見ると、両側の丘の斜面に山百合が群生して咲き乱れていました。今でも山百

合を見るとこの光景を思い出しますが、あんな見事な風景はとつくに無くなっていることでしょう。

### 繰上卒業

そして一年後、草書は千字文が一回終り、岩波文庫の唐詩選の中の漢詩を自分なりに草書で書く勉強と、仮名・隸書の手ほどきを受けた辺り、修業年限の半年短縮により十八年九月の卒業期が近づきました。

慶應では卒業前、就職準備に入る頃、塾長宛に「就職を依頼する文」というのを、巻紙に毛筆、候文で書いて出すという慣習がありました。履歴書も美濃紙に毛筆で書くのがこの頃のきまりで、書道会では先生の指導もあり、これも勉強の一つと書いて書いたものです。一般学生は、学生街の本屋にある雛型を買ったりして苦勞したことだろうと思います。私は巻紙の手紙などというものは後にも先にもこの一回しか書いたことがありません。卒業就職と同時に、大多数の者は、陸軍、海軍へと入隊して行きました。更に十月には所謂学徒出陣があつて、後輩達も続々軍に動員されて行きました。

### 就職・應召

私は、十月一日付で台湾銀行東京支店に入行。ここでも同期生の過半数は、次々に出征して行き、現役入隊を免れた者は、暫くは使えるだろうと営業部に配属されました。私もその一人で、輸入係で業務見習いを始めました。こゝにも書道のグル

ープはあつたようですが、私は音楽好きの同期生に強引に誘われて合唱団に入りました。

台銀は、台湾、中国は勿論、南方の占領地域に多数の支店、営業所を開いていました。この頃戦勢非なるにつれて、営業所開設の為送別会を開いて送り出した人が、間もなく海没したという悲報が入ったり、クエゼリン島の交替要員として発令された人が、出発寸前、その島が玉砕して、不運な前任者が殉職する等、自分の身にも運命の時が迫っていることを感ぜざるを得ませんでした。しかし、人手不足もあり、新人にもどん／＼重要な仕事を委され初めての社会生活は、短期間ながら、楽しく働けたという思いがあります。

昭和十九年五月十三日、丸ビル地下の花月食堂で雑炊の昼食を済ませて、銀行に戻ると、自宅から召集令状が来たとの旨電話連絡が入っていました。遂に来るべきものが来た。直ちに後任者が指名され、翌日の日曜日に事務引継を終り、あと二日間慌た／＼しく身辺整理して、十七日には佐倉の東部六四部隊に入隊しました。

その間に四谷の乾先生の家にご挨拶に伺いました。その時玉江（文子）先生にお別れしたのは、永遠のお別れとなりました。私が復員したのは、昭和二十二年九月にお亡くなりになった翌年でした。から。先日、今年は没後五十年に当たると伺って、流れた歳月の重さを考え、感無量でした。

（以下次号）

## 淡江社書道教室のご案内

無理のない正しい筆使いで字を書いてみませんか。何でもお気軽にお尋ね下さい。

ベテランの講師が基礎から個人指導をしております。

淡江社

東京都新宿区中落合二一七―三  
電話 〇三―三九五―八一五二

### 中落合教室

\*稽古日……………金・土曜日  
新宿区中落合二一七―三

### 世田谷教室

\*稽古日……………金曜日  
世田谷区代田六一二九―六



### ○第21回淡江社翰墨展開催

とき 十一月十二(水)より十六日(日)まで

午前十時より午後六時まで

最終日は午後四時まで

ところ 麻布美術工芸館2Fギャラリー  
今回も長江先生の遺墨を含む五十八点とジュニアの七点を展覧し、同時に会員の親睦の場ともなること、期待しています。

### ○「淡江社だより」第3発行予定について

発行予定 平成十年五月

更に充実したものにしたいと思います。皆様のご投稿が頼りですので、随想、書論、紀行文、和歌、俳句その他お気軽に原稿をお送り下さい。

### ○平成十年度 淡江社総会

平成十年五月二十四日(日)に行う予定  
予算、決算の他今回は役員改選も議題になりますので、多数ご出席をお願いいたします。

### ○第3回見学旅行について

会員の親睦と、書の勉強の一助にもと、見学旅行を既に二回行い、幸いご好評をいただいているようです。

平成十年 六月頃 第3回を行うべく思案中です。良い案がありましたら、お知らせ下さい。

## 編集後記

第二十一回翰墨展に本誌第二号の発行が間に合いましたこと、先づは御投稿いただきました皆様  
に心から御礼を申しあげます。

特に本号は、乾節子先生の「書」私見 を掲載  
させていたゞきましたことを有難く思っております。  
節子先生には九十二才の御高齢にもか、わらず、榛名の春光園に御健在であり、翰墨展にも御  
出品をいただきました。大切な我等の生き字引と  
しての御言葉を噛みしめたいと思います。

今回も皆様の原稿を拝読して、相共通して感じ  
ますことは、人の出逢いの不思議であり、一貫継  
続の妙であります。長江先生の書の見事に先づ  
心打たれ、教場にて御警咳に接し、その高潔な御  
人格にふれ、師弟不離のものとなされ、更に先生と  
は幽冥異にした現在も、感恩と責任と使命に燃え  
て、自らは益々精進し、後進の誠心指導に努力さ  
れるお姿に感銘を受け、まさに道は人により、活  
きて伝わることを学びます。  
Y・N

発行 淡江社

東京都新宿区中落合二一七―三

電話 〇三―三九五―八一五二

編集委員 西岡安清・金丸紀子・松原美子